

・少数言語を学ぶ（研究する）魅力とは？

学生が大学で学ぶ外国語を選択する際の判断基準の一つは、世界でどれだけ多くの人に話されているかです。わたし自身、それが理由で大学でスペイン語を専攻しましたし、その選択が間違っているとは思いませんが、特に今の学生の皆さんには、汎用性の高いものを学ぶと同時に、ニッチなところ、ほとんど誰も目を向けていないことに着目し、極める冒険心を持ってほしいと思います。自分の例で言えば、わたしはバスク語で書かれた文学を研究し始めたその時点から、その分野で日本唯一の研究者ですし、世界的にもバスクの外からバスク語文学を研究している人はごく一握りです。そうして未知の新しい分野を開拓することができます。自分の専門分野にも、専門家としての自分にも付加価値をつけることができます。パイオニアとしての苦労はもちろんありますが、誰にでもできることではなく、自分だからこそできることに従事しているという自負や満足感は、なかなかメジャーな分野では味わえないものではないかと思います。

それから、バスク語のような少数言語を知ることは、ますます多言語化・多様化する世界とわたしたち自身の社会を理解するためにとっても重要です。例えば、英語圏、スペイン語圏、フランス語圏などといってもたった一つの言語しか話されていないわけではなく、国や地域によってきわめて多様な言語が話されていますし、日本を単一言語の国だと思っている人がいまだに多いようですが、アイヌや琉球、韓国や中国をはじめとした異なる言語的・文化的背景を持った人たちはわたしたちのごく身近に存在していて、わたしたちがその存在を社会の一部として気に留めないとすれば、それはたんに無知か無関心のせいで「見えていない」だけです。そして、そうしたマイノリティの人たちは、社会からあたかも存在しないかのように扱われることによって、非常に深い心の傷を負うだけでなく、日常生活を営むにもさまざまな困難や差別に直面しています。

きっかけは言語でも、何か別のことでかまわないのですが、そうして「見えていなかった」ものが「見える」ようになると、世界が一転して、自分が知っていると思っていたのとはまったく異なる多様性、複雑さ、豊かさを備えたものとして立ち現われてきます。その過程で、自分の知らなかったことに目を開かれ、他者に少しでも心を寄せることができるようになれば、より共感力や想像力、寛容さや優しさを持った人間になれるのではないのでしょうか。わたしが思うに、そういった特質はこれからの世界で生きていくために、よりよい社会を作っていくために、わたしたちがもっとも必要とするものです。そして、小説というのはフィクションを通じて読者の想像力や共感力に働きかけるものなので、たんにデータとして知るよりも、人々の暮らしや感情をより生々しく実感することができます。オンライン授業で課題に追われている学生も多いと思いますが、コロナ禍で移動に制限がある今だからこそ、つかの間でも未知の世界に触れることのできる小説にぜひ手を伸ばしてもらえたらと思います。